



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



かまど炊きをする佐古さん



サイン帳や手紙など



お客さんを待つ佐古夫婦

農家民宿でお客さんを

自然体のおもてなしで癒す元気人

但東地域で、農家民宿を切り盛りし、「農林漁家民宿おかあさん100選」に認定された元気な女性を紹介します。

佐古明美さん(57歳)但東町奥藤

おかあさん100選

「どうぞ、どうぞ、お上がりください。囲炉裏を囲んではどうですか」と話すのは、農家民宿「善」で切り盛りする佐古明美さん。

佐古さんは、2月23日、農林水産省などの「農林漁家民宿おかあさん100選」に認定されました。但馬地域では、初めてです。

この100選は、農林漁家民宿のPRのために尽力するとともに、自身の民宿経営に成功し、地域活性化に寄与している女性100人が全国から選ばれたものです。

佐古さんは「ほかにも頑張っておられる方があるのに、私を選ばれ、そんな器ではないのですが」と控えめに話します。

夫の夢「農家民宿」を支えて

この農家民宿は、築100年の古民家を夫の善次郎さんが手作りして改装したもので、平成15年12月に、県内で初めてオープンしました。

佐古さんは、善次郎さんと家業の織物業を20年以上続けている中、4人の子どもも

独立し、善次郎さんから民宿への転業を持ち掛けられます。「客商売をするのは嫌だったが、生活していかなくてはいけません。人生は1度なので、夫の夢をかなえ、支えていきたいと思

癒したり、癒されたり

お客さんは、毎年や隔年で訪れる家族連れなどが多く、中には、年4回、四季ごとに訪れる方もあります。

佐古さんはお客さんに「お母さん」と呼ばれ、「ただいま」「お帰り」と話す、親戚が里帰りするような仲です。

お客さんには、さまざまな悩みを打ち明けられることもあるそうで、佐古さんは「疲れがたまつて、ほっとした場所を探されている方が多いようです。お客さんと会話することで、癒したり、癒されたこと、お客さんの笑顔を見ると、私の方が元気になります。命のツーリズムを感じます」と話します。

民宿には、お客さんが記入



▲農家民宿で切り盛りする佐古さん。趣味は、ジョギング、手芸、旅行

したサイン帳や手紙などが並んでおり、「お母さんまた明日から頑張るね」「癒されました。また来ます」などと書かれています。

佐古さんは「これは私の宝で、励みになります。気取らずそのまま、細く長くをモットーに、元気に頑張りたいです」と話します。

農家民宿が増えてほしい

民宿では、地元の野菜などでもてなす農家料理が売りで、かまどで炊く古代米のご飯の香りが立ち込めます。

佐古さんは「自然のものを使って、自然体のおもてなしを心掛けています。もっと民宿が増えたらいいなと思います。経験者として民宿をしたの方にアドバイスしてあげたい」と話し、お客さんを迎え入れる準備に追われていました。

広報マンがやってきた!

幼稚園編

3

合橋幼稚園

(但東)

〈園児11人〉



但東地域の西に位置する合橋幼稚園は、付近を流れる出石川や周囲の山々など、自然の息吹を感じるのどかな場所です。

3月2日、ひなまつりを次の日に控え、「おひなさま作り」が行われましたので、その様子をのぞいてみました。

なぜ、おひなさまを飾るの?

先生が紙芝居で「おひなさまは、私たちを守ってくれます。健康と幸せを祈って飾るのです」と、流しびなの由来からおひなさまを飾ることになった話を教えてくれました。



園児たちは、大切に保管していた給食のゼリーの容器と折り紙を使って、おひなさま作りを始めました。

かわいい顔!

かっこいい顔!!

まず、肌色の色紙にマジックで顔を書いていきます。

「かわいいー」「見てほら!」

「イケ面や!」などと言いながら、表情豊かな顔がたくさんできました。

頑張ってるよ!

自分だけのおひなさま

顔ができる、給食のゼリーの容器に貼り付け、冠を付けます。そして



て、色紙を着物に見立てて巻き付け、模様を付けて完成です。

紙芝居に描かれたおひなさまを何度も見ながら、自分だけのおひなさまを作りました。

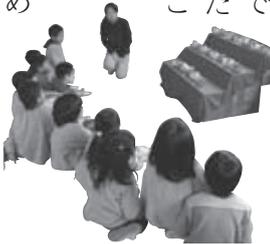
ひなまつり、楽しみだね!

完成したおひなさまは、ひな壇に飾っていきます。

「お内裏さ〜まと、おひなさま〜」と口ずさむほど、園児たちは自分の作ったおひなさまに満足そうでした。



ひな壇に11組22体のおひなさまが並びました。上手いかならず、途中で嫌になったことも、このおひなさまの姿を見ると「あきらめなくて良かった」と思えます。翌日のひなまつりが楽しみになりました。



顔輪笑の

限られた字数で人間の喜怒哀楽を詠う! 『川柳「弘道」』(出石)

「人間の生きざまを詠む、それが川柳」

会員11人のこの会は、毎月1回、木谷盛男さん(京町)を講師に、弘道地区公民館(出石町内町)で、川柳を勉強しています。五・七・五の17音で詠まれる

川柳は、世界で一番短い定型詩の一つです。同じ17音でも、俳句とは異なり、自らの実体験や感じたままを発想に結びつけて表現します。

日本語の持つ一行詩の美しさ、素晴らしさ(姿、リズム、そして心)を表現することが川柳の醍醐味でもあります。

それらを踏まえ、皆さんは、活動日当日に与えられる「席題」で句を作るだけでなく、事前に与えられた「兼題」に掛かる句を短冊に書いて提出します。それらは、選考(句を選考する人)が披露(読み上げ)し、作者自らが



▲人間の内面を詠う川柳

呼名(名乗る)します。選考の力量が試される時です。そのため、皆さんは、活動日以外にも、各地で開催される川柳大会などに出掛け、切磋琢磨しています。「挑戦する心」の表れです。

代表の井狩ふさ子さん(出石町魚屋)は「全員が、仕事と両立しながら川柳に対して前向きに、自分の思いを詠んでいます。川柳は柔らかいイメージですが、一歩踏み込めば奥の深い自分史があります。この会は和気あいあいと活動でき、今以上に川柳大会にも挑戦し、長く続けていきたいです」と話します。

面白おかしく詠えばいいと思われがちな川柳ですが、真実をとらえた句こそが、結果的に、自然なくすぐりを誘っているのです。

『響き合う十七音の友がいる』興味のある方は入会を。井狩さん(☎52-2223)まで。